

紀要『人文・自然研究』第19号

虚構の他者と現実の他者
G・バタイユは誰とコミュニケーションをするのか？

神田浩一



2025年3月25日発行

一橋大学 全学共通教育センター

人文・自然研究 第19号

Hitotsubashi Review of Arts and Sciences 19



2025年3月25日発行

発行：一橋大学全学共通教育センター

186-8601 東京都国立市中2-1

組版：精興社

虚構の他者と現実の他者

G・バタイユは誰とコミュニケーションをするのか？

神田浩一

1. コミュニケーションへの熱い意志

フランスの作家ジョルジュ・バタイユ（1897-1962）が、30年代に残した草稿の中に次のような断章が見られる。これは頓挫した著作の序文として構想されたと思われる。

一冊の本を書かせるさまざまな理由は、一人の人間とそれに似た者たちとの間にある関係を変えたいという欲望に帰することが出来る。この関係は受け容れがたいものと判断され、耐え難い悲惨とみなされている⁽¹⁾。

バタイユに限らず、文章を書き発表しようとする人間にとって、書くという行為で他者との現状の関係を変えたいという祈念は、当然と言うよりむしろ陳腐と言えるかもしれない。しかしこのバタイユの凡庸な希求が特異なものとなるのは、「似た者たち」となす通常の関係には飽き足らず、それを根源的に変容させたいという〈コミュニケーション⁽²⁾〉に対する意欲のすさまじさにある。通常のコミュニケーションが「社会生活を営む人間の間に行われる知覚・感情・思考の伝達」（『広辞苑』第6版）であるのに対して、バタイユのコミュニケーションにおいては、「知覚・感情・思考の伝達」があまりにも強すぎて、伝達をする主体も伝達を受ける主体もその強度に耐えかねて自己崩壊をするところまでいたる。バタイユの目指すコミュニケーションとはこの自己喪失の分かち合いである。バタイユは生涯を通じてこのコミュニケーションを求め続けた。その意味ではコミュニケーションは彼の存在理由であったとも言える。

本稿はバタイユのコミュニケーションについて考察していく。コミュニケーションは、この作家の中心テーマであるので、当然のことながら、すでに多くの考察が存在する⁽³⁾。だから屋上屋を架すことにならないようにアプローチには工夫が必要になる。コミュニケーションを理性の彼岸でなされる神秘体験として理解するのではなく、あるいはコミュニケーションを主体の形而上学批判の特権的な契機として利用するのでもなく、レトリックを駆使した文学的な美文によってコミュニケーションとは何かを何となくわかった気にさせるのでもなく、バタイユのテキストに書かれていることを愚直に読み取るために、本稿では散文的なアプローチを採用する。具体的には、多岐にわたるコミュニケーションの問題の中から問題を一つに絞って、バタイユが存在のすべてを賭してコミュニケーションを求める相手である他者とはどのような存在であるのかという点に注目していく。コミュニケーションの相手を考えることは、21世紀にバタイユを読む際にその限界と可能性を同時に示してくれるからである。

まずはバタイユにとって生涯を通じて重要なアイコンであった中国人の死刑囚の死刑執行の写真に関するバタイユの省察を取り上げ、バタイユのコミュニケーションの相手である他者には虚構の世界に住まう登場人物と現実世界に住まう読者の2種類があることを見ていく。



次にそれらの2種類の他者がバタイユにとってそれぞれどのような存在とみなされていたかをバタイユのサド論を分析することで考察する。

2. 誰とコミュニケーションをするのか？ 2種類の他者

自ら刊行に携わったという意味では最後の著作である『エロスの涙』（1961）の最後の章において、バタイユは、百刻みの刑に処せられる中国人死刑囚の写真を載せ、次のような言葉を添えている。

私は、1925年以来、これらの写真の一枚を所有している。それは、フランスの精神分析学者の草分けの1人であるボレル博士からもらったものである。この写真は、私の人生において、ある決定的な役割を持った。私は、この恍惚的（？）であると同時に耐え難い苦痛の像によって付き纏われることをやめなかったのである。私は、サド侯爵が、夢想しながらも彼には接し得ないものであるった現実の処刑に立ち会うこともなしに、処刑の像から引き出したでもあろう利用法を想像する。彼は、その像を、なんらかの仕方で、たえず自分の目の前に持つというわけなのだ。けれども、サドは、孤独の中において、少なくとも、相対的な孤独の中において、それを見ようとしたでもあろう。その孤独なしには、恍惚的で悦楽的な解決策は考えられないのである⁽⁴⁾。

死刑執行の陰惨な現場を撮ったこれらの写真がバタイユの「人生に決定的な役割を持った」のは、死とエロスの親近性、宗教的な恍惚とエロティシズムのスクランダラスな類似性、キリストの磔刑図のパロディとしての神なき時代の磔刑図、供儀の布置におけるコミュニケーションの可能性などの様々なレベルで、彼のファンタスムを形象化したまさに奇跡と形容しても良いアイコンであったからである。

バタイユのファンタスムを様々なレベルで可視化したこのイメージがこの作家に及ぼした効果について、バタイユ研究において重要な足跡を残したドゥニ・オリエは次のように簡潔に述べている。

ひとつ確かなことがある。バタイユは処刑される中国人の写真のイメージを前にして書き始めたということだ⁽⁵⁾。

最後の著作の最後を飾る写真は、作家バタイユを誕生させた最初の契機でもあった。脅迫観念に苦しんでいた30代前後のバタイユは、精神分析医アドリアン・ボレル博士と二人三脚で分析治療を行い、最終的には『眼球譚』（1928）という暴力的なポルノグラフィーを作り出すことで強迫観念から抜け出す。その際に、大きな役割を担ったのが、このむごたらしい死刑執行の写真である。混沌とした強迫観念は物語という秩序の枠組みを与えられることで制御可能な耐えられるものへと変貌したのだが、その際に写真に現れた表象が見事にバタイユの強迫観念を組織化、結晶化させたのである。実質的なデビュー作を生み出すのに大きな役割を果たした点でも、この写真はバタイユの人生に大きな意味を持っていたと言えるだろう⁽⁶⁾。

作家バタイユの誕生に多大な貢献をもたらした死刑執行の写真は、それ以降も何度も言及される。例えば、写真は、彼が「内的体験」と後に名付ける自己喪失の体験を引き起こす契機になることで、彼の思想を深化させる触媒になる。主著の1つである『内的体験』



(1943) には次のような文章がある。

いずれにせよ、われわれは劇によって初めて、点という対象を投影することできる。私は衝撃的なイメージを用いた。特に、ある中国人を移した写真のイメージ——あるいは、ときにはその記憶を——見つめていた。その中国人は、私が生きている時代に刑苦にかけられたはずである。この刑苦に関して、私はかつて一連の連続する写真を入手していた。最後には、胸の皮を剥がされた犠牲者は、肘と膝のところで腕と足を切断されて身をよじっていた。頭髮は逆立ち、おぞましく、錯乱して、血の筋を滴らせながら、雀蜂のように美しい。

私は「美しい」と書いた！……何かが私から逃げ去り、遠ざかり、恐れが私を自分自身から遠ざけ、太陽を見つめようとしたかのように、私の両目は逸れて滑っていく⁽⁷⁾。

ここでバタイユの行っているのは、イグナチウス・デ・ロヨラの『靈操』のパロディである。キリスト教の神秘家たちがキリストの磔刑図を見ながら磔刑に処せられる神の子に同一化して、あたかもその死を経験することで神秘体験を得るのに対して、バタイユは神の子ではなく、王族アオ＝ハン＝ウァンを殺害したという罪状で生きたまま身体を切り刻まれる死刑囚の凄惨な死の情景の写真を見ることで、おぞましさや恐怖などが混じり合った極端な情動の奔流の中に我を失い自己喪失の恍惚に身を委ねる。この自己喪失こそがバタイユのコミュニケーションである。ジャン・ミシェル＝レイはバタイユのコミュニケーションが生じる条件について次のように簡潔にまとめている。

すべての交流は、裂け目、自分の外に出ること、外在性、外在性への主体の「喪失」を必要としている。それは破壊と死の基礎の上で実現される。(供犠と性活動はその特権的な例である。) 交流への道、いっさいの言葉の彼岸での絶頂への到達が可能となるのは、存在の、私の存在の、「他者」の存在の完全性を賭けることによってだけである⁽⁸⁾。

レイによれば、バタイユ的なコミュニケーションが果たされるためには、自己保存の本能に抗って自己同一性の閉域を破壊して自分の外へ出る必要がある。レイはそれを「存在の完全性を賭ける」と形容している。実際にバタイユは次のように述べている。

私が話題にした若い魅惑的な中国人は、死刑執行人の作業に委ねられている。私は、サディズム的な本能とは無関係な愛情で彼を愛していた。彼は、私に自分の苦痛を、あるいはむしろ自分の苦痛の過剰さを交流させたのだ。そしてそれは、まさに私が探し求めていたものだった。それを楽しむためではなく、崩壊に抗うものを私のなかで崩壊させるために⁽⁹⁾。

個体の自己同一性を破壊して外に出ることは、死にも比される〈体験〉(自己喪失の瞬間にはその自己喪失という体験を享受する主体が消滅しているので厳密には体験と言い難いのだが)なので、主体にとっては恐怖をもたらす。そのためにバタイユの中には「崩壊に抗うもの」が生まれるが、その抵抗を乗り越え、抵抗を「崩壊させる」。そうしてバタイユはこの死刑囚と「苦痛」あるいは「苦痛の過剰さ」をコミュニケート(引用では「交



流」)する。

以上、百刻みの刑に関して書かれたテキストを見ていくと、バタイユが目指すコミュニケーションの相手は何よりもまず「中国人の死刑囚」であったことがわかる。つまり、虚構世界における登場人物（正確にはその表象）である。

しかし、ここで留意すべき点がある。生きたまま身体を刻まれて徐々に死へと向かっている死刑囚の写真を前に瞑想をして、その結果、自己喪失を引き起こし、死刑囚とコミュニケーションを果たしているという文章を、バタイユは何のためにわざわざ書くのか、ということである。文章によって読者とコミュニケーションを果たすためである。その点も考慮に入れると、バタイユのコミュニケーションの相手は2種類存在することになる。1つ目は虚構世界に住まう表象としての登場人物であり、2つ目は作家バタイユと同じように現実世界に生きるバタイユの書いた文章を読む読者である。

それではバタイユはこの2種類の他者のことをどのように考えていたのだろうか？ 2種類の他者とのコミュニケーションには違いがあるのだろうか？ 2種類の他者とのコミュニケーションは等価なものなのか、それとも優先順位があるのだろうか？

ところで、虚構の登場人物とのコミュニケーションに関しては何よりもまず次のような疑念が生じる。このコミュニケーションにおいては、相手がバタイユの呼びかけにその場ですぐに応える現実の存在でないために、たとえバタイユが「サディズム的な本能とは無関係な愛情で彼を愛していた」と中国人死刑囚への愛を語り、「楽しむため」ではないと断言しても、それらはすべてバタイユの独りよがりな思い込みでしかない言われても仕方がないところがあるということだ。実際に死刑囚の側に立ってみると赤の他人が自分の苦痛を快樂のために利用しているように思える。結局、バタイユは、自分の快樂のために、虚構の登場人物の苦痛の表象を濫用しているのではないか？ そして、死が表象された写真を前にして自己喪失をするというバタイユの表象とのコミュニケーションは、ポルノグラフィックな表象を前にして自慰にふける行為と同じではないのか？

これらの疑念に答えるために、また虚構の登場人物とのコミュニケーションと現実の読者とのコミュニケーションの違いに考えていくために、中国人の死刑囚の写真に続いて、今度はバタイユのサド論に注目していこう。サドこそ他者を蹂躪することで快樂を抱く人物の物語を飽くことなく延々と書き続けた人物であるからだ。

3. サドにおける他者の否定と他者への願い

晩年の成熟したバタイユの思想が展開される『エロティシズム』（1957）には、己の快樂だけをひたすら追求しそのために他者を否定するサドの挑発的な価値観が語られる「サドの至高者」とそのサドの価値観が、サドによって否定される他者にとってどのような意味を持つかが示される「サドと正常な人間」という2つのサド論が収録されている。この2つの論文において、サドが〈他者〉という存在をどのように捉えていたか、そしてそのサドをバタイユがどのように評価しているのかを考察していくことで、コミュニケーションの2種類の相手である虚構の登場人物と現実の読者のことをバタイユがどのように考えていたのかを明らかにしていこう。

バタイユによれば、サドは獄中の孤独の中で真理を掴んだ。そして世間では受け容れ難いその真理を伝えるために作品を書き続けた。その真理とは次のようなものである。

サドは、受け容れがたい価値観を主張するために止むことなく作品を書き続けた。彼



の言うところを信ずるならば、生は快樂の追求であり、快樂は生の破壊に比例しているということになる。換言すれば、生は、生の原則を極悪非道なやり方で否定するとき最高の強度に達するということである⁽¹⁰⁾。

サドは獄中の孤独の中で、一種の思考実験として独特な思想を展開していく。サドによれば、人間は相互の間にいかなる関係もない絶対的に孤独な存在であるので、唯一の規範は、己に快樂を与えるものだけに価値があるということだ⁽¹¹⁾。さらにサドにとっては性の快樂は他者の否定に密接に結びついている。だからサドにとって他者は快樂の道具以外の意味は持たない。他者の最大の苦痛でさえ、自分の快樂に比べたら取るに足らないものである。しかし、サドはその真理を書き付ける。その文章は自分自身に対してだけではなく他者に対して向けられたものだ。彼が導き出した真理を脅威として感じ、決して認めないであろう「正常な人間」にもその中には入っているだろう。他者を否定しつつ、同時に他者に向けて書き続けたサドの振る舞いは矛盾しているように見える。しかしこのサドの行為は、2種類の他者の区別を導入すれば、それほど奇矯なものではなくなる。

サドの実生活を見ると、他者の否定に局限されたあの至高性の肯定は欺瞞に思えてくる。だが欺瞞は、弱さのまったくない思想を作り上げるにはぜひとも必要だったのだ。実生活においてサドは他者のことを考慮に入れていた。しかし彼が想像した激情の完全実現のイメージ、独房の孤独の中で、彼が繰り返し思い描いたこのイメージは、他者など物の数に入れぬように求めていたのである⁽¹²⁾。

サドが何よりもコミュニケーションの相手と切望しているのは、彼の発見した真理が記された文章を読む現実世界の読者である。実際にバタイユはサドが読者とのコミュニケーションを切望していたことを次のように述べている。

彼は、他者など取るに足りないという真理を——他者たちに——啓示しようとしたその原稿が紛失したと聞いて「血の涙」を流したのではなかったのか⁽¹³⁾？

切実なコミュニケーションの対象である読者という他者に比べると、物語の中に出てくる登場人物とのコミュニケーションは、バタイユのサド論においては、まったく俎上に載せられることはない。むしろサドの物語の中で、他者の否定はその局限まで達する。サドは、物語の登場人物に対しては、現実世界の他者に対して見せたような気遣いは一切見せない。虚構の登場人物は、どこまへ行っても究極の他者否定という思考実験のモルモットとしての地位に甘んじている。

自らの真理に従えば本来的には否定の対象であるはずの読者とのコミュニケーションを求めたサドを論じながら、バタイユは同時に自分の作家としての営みについても語っていると言えるだろう。バタイユも、例えば、辱められ絞殺され死体を毀損される神父が登場する『眼球譚』のような物語が示しているように、虚構の世界の登場人物を否定する物語を構築することで、登場人物とのコミュニケーションよりも、まずはそういった情動を揺さぶる光景を読むことで情動を揺さぶられる読者とのコミュニケーションを求めたのであった。



4. 結論 虚構の他者と現実の他者

以上、百刻みの刑の写真とサドに関するバタイユのコメントからバタイユがこの世の何よりも切望するコミュニケーションの相手である他者とはどのような人なのかを考察してきた。

バタイユがコミュニケーションの相手として一番希求していた他者とは現実世界に属する読者である。現実世界に住まう読者は、たとえバタイユのテキストに表象された暴力的なイメージにさらされるとしても、実際にテキスト内で起こっているように陵辱され痛めつけられることはない。一方、虚構世界において表象された他者である登場人物（フィクションだけではなくエクリチュールの実践行為において表象化されたイメージ）は、サドの物語がその極限であるが、精神的にも肉体的にも暴力にさらされ徹底的に否定される。サドの物語の登場人物が犯罪者も犠牲者も獄中のサドの思考実験の記号的な存在であるように、バタイユのテキストの犠牲者たちもどこか抽象的、記号的な存在となっている。例えば、死刑囚フー・チュー・リー（富珠哩）は固有名を持った個人としてバタイユに呼びかけられることはない。神秘主義者にとってのキリストの磔刑図のように、人としての個別性は剥ぎ取られ、バタイユの「無神学」体系における死の表象として抽象的な「モノ」と化して恍惚のために利用されている。実際にバタイユは写真を見ながら、死刑囚だけではなく、死刑執行人にも同一化している⁽¹⁴⁾。死の表象はバタイユの恍惚のためにある意味では〈良いように〉利用されている。その点から見れば、死の表象を前にしたバタイユの恍惚も、死と性というイメージの違いはあれども、ボルノグラフィックな表象を前にした自慰行為と本質的にはその強度以外は変わらないかもしれない。

またサドを論じる際にもバタイユの興味の対象は、語りながら暴力を行使する登場人物とそういった登場人物を想像＝創造する作家サドとその否定の対象である読者とのコミュニケーションに対する強い意志にもっぱら向けられていた。虚構に現れる暴力の犠牲者たちはただ情念をかき立てる道具立てに過ぎないように見える（虚構の登場人物＝犠牲者がある意味では己の快楽に利用するバタイユの虚構の道具立ての中に、アンドレア・ドウォーキンを嚆矢とするアメリカのフェミニストたちは、父権社会において犠牲者である女性の姿を重ね合わせて強く反発を抱くのだろう）。

なぜバタイユは、虚構の他者たちに対して、現実の他者たちには決してできないようなむごたらしい試練を与えることが可能なのだろうか。

第一にはバタイユやサドが創作する虚構の世界で展開される暴力や殺人は現実世界では実現不可能であるという身も蓋もない事情があるだろう。現実世界に住むバタイユは、たとえ真面目な人たちからなる現実世界に毒を吐き捨てることはあるにせよ、法と秩序が支配する現実世界の重要性を理解し、その世界の掟にしたがって生きていた。現実世界における暴力や殺人を無条件に肯定していたわけではない。ただしバタイユは、自分を含めたすべての人間は、日常の世界でなされる意味や感情のやりとりといったレベルのコミュニケーションではなく、自分と他者を激しく暴力的に引き裂くことで成り立つコミュニケーションをしたいという欲望を根源的には抱いていると考えていた。その自己の引き裂きを引き起こすための契機として、虚構世界の登場人物は、現実の人間の代理としてあえてむごたらしい試練を受ける。

第二には（こちらの方がはるかに重要な理由であるが）暴力が暴力として力を発揮するためには実は言語によって迂回をすることが必要ということがある。「社会学研究会」や秘密結社「アセファル」などの現実レベルでの世界変革の試みが失敗に終わり、第二次世





界大戦の擾乱の中で、ある意味、宙ぶりの時間の中で、孤独の中で書くという行為に沈潜していく中で、バタイユは、実際の経験こそが最大の強度を持ちうるという常識とは異なり、例えば直接的な暴力は、それが意識や言語の迂回を経なければ、強度を持ち得ないと考えるようになった。つまり現実世界で死の表象を体現する供儀を行っても、それは望むような自己喪失をもたらすかどうか怪しいと考えるようになったのである。実際に、バタイユは、サドの論の中では、サドが本来なら言語の領域には属さない暴力を言語化することによって、よりいっそう暴力を享受することができるようになったと述べているし⁽¹⁵⁾、また、バタイユにとって百刻みの写真が真に力を発揮したのはヨガの手ほどきをうけて、情動の衝撃のある種の精神と身体の技法によって活用できるようになってからである。

ずっと後になって、一九三八年に、ある友人が私にヨガの行法の手ほどきをしてくれた。私が、この像の激しさの中に、無限の倒立的な価値を見抜いたのは、その機会においてであった。この激しさ——こんにち、なお、私は、より狂おしく、より恐ろしい別の激しさを思いつくことができない——に発して、私は、非常に動転させられたので、恍惚に達したほどである⁽¹⁶⁾。

つまり虚構の人物は、現実の読者に代わってもっぱら供儀の生け贄の役割を担うが、それは虚構であるがゆえに現実の俗なる秩序を破壊しないことと、虚構であるがゆえに言語と意識の強化を受けて、直接行動が持ち得ないような強度を体験にもたらすという二重の意味で生け贄の任に耐えることができるからである。

バタイユは、現実と虚構を峻別して、虚構の人物をある意味で自己喪失のための道具として利用して、何よりもまず現実の読者とのコミュニケーションを求めた。しかしながら、バタイユのこの企てには、大きな矛盾が潜んでいる。本来は現実には属するはずの読者は、現実には属する作家バタイユにとって、現実世界から一歩身を引き虚構の世界へと埋没して自己喪失を果たす契機においてしか見出されず、その意味では百刻みの刑を受ける中国人の死刑囚と同じような虚構の次元的存在になってしまい、一方、読者の方も現実世界から離れ、虚構の世界に入り込み、自己喪失を果たすことによってしかコミュニケーションができない。現実には属する作家バタイユは同じく現実には属する読者とのコミュニケーションを渴望するが、それは必ず虚構の媒介が必要で、(常識とは逆に)現実世界では決して虚構の世界で起こるのほどの強度をもっては果たされない。結局、バタイユが望むほどの強度のあるコミュニケーションには虚構の介入が必要なので、現実と虚構の区別は無効にされてしまう。

晩年のバタイユの思考の重心が「文学」に向かったのも自らの求めるコミュニケーションが虚構を介さなければ実現不可能であることに自覚的になったと考えられる。

そして、現実と虚構の複雑な関係に関しては、有用性と文学の関係を論じたカフカ論やサルトルとカミュの論争をバタイユがどのように評価したかなどの観点から稿を改めて考察するべきであろう。

注

(1) Georges Bataille, « Les raisons d'écrire un livre... », *Œuvres Complètes*, t. II, Paris, Gallimard, 1970, p. 143.

(2) バタイユの「communication」に関しては、その独特なニュアンスを表現するために色々な訳語が考えられた。60年代に『文学と悪』では山本功は「霊的交通」と訳し、70年代に『有罪者』や『内的体験』では出口裕弘は「交感」と訳している。80年代以降は「交流」

が定番の訳となっている。しかし、この論文では、定番の「交流」ではなく、「コミュニケーション」という言葉を使用する。ラテン語の「communis 共通の・共有の」という意味を語源的に持っていることが見やすくなりこと、さらには「communion 聖体拝領」や「communauté 共同体」と近い言葉であることが分かること、さらに日常的に使用される「コミュニケーション」という言葉にバタイユは独特な意味を付与したことが分かりやすくなるからである。

- (3) あまりにも関連する文献が多いので、いちいち挙げないが、例えば、コミュニケーションと供儀、コミュニケーションと贈与、コミュニケーションと主体、コミュニケーションと文学、コミュニケーションと倫理などの観点からすでに考察がなされている。
- (4) Bataille, *Les larmes d'Éros*, *Œuvres Complètes*, t. X, Paris, Gallimard, 1987, p. 627. (ジョルジュ・バタイユ『エロスの涙』森本和夫訳、ちくま学芸文庫、2001年、310-311頁)
- (5) Denis Hollier, *La prise de la Concord*, Paris, Gallimard, 1974, p. 155. (ドゥニ・オリエ『ジョルジュ・バタイユの反建築 コンコルド広場占拠』岩野卓司他訳、水声社、2015年、153頁)
- (6) バタイユが分析治療として『眼球譚』を生み出す際にどのように混沌とした脅迫観念を整理していったかについては拙論を参照のこと。(神田浩一「ジョルジュ・バタイユ『眼球譚』——癒しとしての物語——」『仏語仏文学研究』第12号、東京大学仏語仏文学研究会、1994年、137-153頁)
- (7) Bataille, *L'expérience intérieure*, *Œuvres Complètes*, t. V, Paris, Gallimard, 1973, p. 139. (ジョルジュ・バタイユ『内的体験』江澤健一郎訳、河出文庫、2022年、250-251頁)
- (8) Jean-Michel Rey, « La mise en jeu », *L'AR*, n 32, 1967, p. 48. (J-M・レイ「賭け」横張誠訳、清水徹・出口裕弘編『バタイユの世界』、青土社、1995年、277頁)
- (9) Bataille, *L'expérience intérieure*, *Œuvres Complètes*, t. V, Paris, Gallimard, 1973, p. 140. (ジョルジュ・バタイユ『内的体験』江澤健一郎訳、河出文庫、2022年、252-253頁)
- (10) Bataille, *Érotisme*, *Œuvres complètes* t. X, Gallimard, 1987, p. 179. (ジョルジュ・バタイユ『エロティシズム』酒井健訳、ちくま学芸文庫、2004年、305頁)
- (11) このサドの思想に関しては、バタイユは「現実に根ざしていない人工的なものだ」ときっぱりと批判している。人間は相互依存がなければ、いかなる人間の生もあり得ないとバタイユは考えるからだ。同時にバタイユはこのサドの思考実験は人間の至高な状態に関する深い省察を与えたと評価している。
- (12) Bataille, *Érotisme*, *Œuvres complètes* t. X, Gallimard, 1987, p. 167. (ジョルジュ・バタイユ『エロティシズム』酒井健訳、ちくま学芸文庫、2004年、284頁)
- (13) Bataille, *Érotisme*, *Œuvres complètes* t. X, Gallimard, 1987, p. 169. (ジョルジュ・バタイユ『エロティシズム』酒井健訳、ちくま学芸文庫、2004年、287頁)
- (14) 「私は、写真に写った中国の死刑執行人のイメージに取り憑かれている。彼は、犠牲者の足を膝のところで切ろうと夢中になっている。犠牲者は柱に縛り付けられ、白目をむき、頭をのけぞらせ、ゆがんだ唇から歯が見えている。」Bataille, *L'expérience intérieure*, *Œuvres Complètes*, t. V, Paris, Gallimard, 1973, p. 275. (ジョルジュ・バタイユ『有罪者』江澤健一郎訳、河出文庫、2017年、75頁)
- (15) 「意識のおかげでサドは、あたかも事物が問題になっているかのように、自分を錯乱させる対象について語る事ができたのである。そればかりではない、暴力の動きを遅くするこの迂回策のおかげで、彼は暴力をよりいっそう享楽できるようになったのである。」Bataille, *Érotisme*, *Œuvres complètes* t. X, Gallimard, 1987, p. 192. (ジョルジュ・バタイユ『エロティシズム』酒井健訳、ちくま学芸文庫、2004年、330-331頁)
- (16) Bataille, *Les larmes d'Éros*, *Œuvres Complètes*, t. X, Paris, Gallimard, 1987, p. 627. (ジョルジュ・バタイユ『エロスの涙』森本和夫訳、ちくま学芸文庫、2001年、311頁)



The fictional other and the real other: Who does G. Bataille communicate with ?

Koichi KANDA

With whom does Bataille desire communication ? This paper (re) considers communication, a central theme of French thinker Georges Bataille (1897–1962). Just as Christian mystics imagined the torture of Christ as if it were happening to them and used it as an opportunity for mystical experiences, Bataille experiences self-loss by meditating on gruesome photographs of Chinese death row inmates being cut up while still alive. Unlike communication, which is generally considered to be the sharing of information or emotions, for Bataille, communication is the sharing of self-loss. With whom does Bataille share his self-loss in front of the photographs ? The death row inmate who is dying, Bataille considers. And by describing this process, he hopes that the reader will experience self-loss, and that communication will be realized. In other words, there are two types of people with whom Bataille seeks to communicate: fictional others (characters) and real others (readers). These two types of others are not equivalent. For Bataille, who lives in the real world, his communication partners are above all readers who also live in the real world. However, Bataille as a writer is unable to communicate directly with real readers. For this reason, he necessarily needs to represent the self-loss of the characters in the fictional world, which is the reason literature gained increased importance in Bataille's writing activities.

